

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

この入道殿の御弟に、そのころ右大臣実雄と聞ゆる、姫君あまた持ち給へる中に、すぐれたるをらうたきものに思しかしづく。今上の女御代（注1）にいで給ふべきを、やがてそのついで、文応元年入内あるべく思おきてたり。院にも御気色たまはり給ふ。入道殿の御孫の姫君も参り給ふべき聞えはあれど、さしもやはとおしたち給ふ。いとたけき御心なるべし。

この姫君の御兄あまたものし給ふ中のこのかみにて、中納言公宗と聞ゆる、いかなる御心かありけん、下たくけぶりにくゆりわび給ふぞ、いとほしかりける。さるは、いとあるまじきことと思ひはなつにしも、したがはぬ心の苦しき、おきふし、葦のねなきがちにて、御いそぎの近づくにつけても、我がの気色にてのみほれ過ぐし給ふを、大臣は又いかさまにかと苦しう思す。

初秋風けしきだちて、艶ある夕暮に、大臣渡り給ひて見給へば、姫君、薄色に女郎花などひき重ねて、几帳に少しはづれてる給へるさまかたち、常よりもいふよしなくあてに匂ひみちて、らうたく見え給ふ。御髪いとこちたく、五重の扇とかやを広げたらんさまして、少し色なる方にぞ見え給へど、筋こまやかに顔より裾までまよふすぢなく美し。ただ人にはげに惜しかりぬべき人がらにぞおはする。

几帳おしやりて、わざとなく拍子うちならして、御琴ひかせ奉り給ふ。折しも中納言参り給へり。「こち」とのたまへば、うちかしこまりて、御簾の内にならひ給ふさまかたち、この君しもぞ又いとめでたく、あくまでしめやかに心の底のゆかしう、そぞろに心づかひせらるるやうにて、こまやかになまめかしう、すみたるさまして、あてに美し。いとどもてしづめて、騒ぐ御胸を念じつつ、用意を加へ給へり。

笛少し吹きならし給へば、雲ぬにすみのほりて、いとおもしろし。御琴の音ほのかにらうたげなる、かきあはせの程、なかなか聞きもとめられず、涙うきぬべきを、つれなくもてなし給ふ。撫子の露もさながらきらめきたる小桂に、御髪はこほれかかりて、少し傾きかかり給へるかたはら目、まめやかに光を放つとはかかるをや、と見え給ふ。よろしきをだに、人の親はいかがは見なす。ましてかくたくひなき御有様どもなめれば、よにしらぬ心の闇にまどひ給ふも、ことわりなるべし。

十月二十二日参り給ふ儀式、これもいとめでたし。出車（注2）十両、一の車左は大宮殿、二位中将基輔の女とぞ聞えし。二の左は春日、三位中将実平の女。右は新大納言、この新大納言は為家の女とかや聞えし。それよりも下、ましてくだくだしければむつかし。御雑仕、青柳・梅が枝・高砂・貫川といひし、この貫川を、御門忍びて御覧じて、姫宮一所出でものし給ひき。その姫宮は、末に近衛関白家基の北の政所になり給ひにき。よろづのことよりも、女御の御様かたちのめでたくおはしませば、上も思ほしつきにたり。女は十六にぞなり給ふ。御門は十二の御年なれど、いとおとなしくおよすけ給へれば、めやすき御ほどなりけり。かの下くゆる心ちにも、いと嬉しきものから、心は心として、胸のみ苦しきさまされば、忍びはつべき心ちし給はぬぞ、つひにいかになり給はんと、いとほしき。程なく后立ちありしかば、大臣心ゆきて思さるること限りなし。

〔増鏡〕による

(注1) 天皇にまだ女御のいない場合、臨時に選ばれて大嘗会の祓に奉仕する女官。

(注2) 女房たちが簾の下から衣の袖口や裾を出して乗っている車。

問一 傍線部「さるは」の指す内容として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 右大臣実雄が、娘ではなく、あえて入道殿の孫の姫君を女御に立てた猛々しい心。
- ロ 右大臣実雄が、入道殿の気持ちを知りながら、あえて娘を女御に立てた猛々しい心。
- ハ 右大臣実雄が、院の気持ちを知りながら、あえて娘を女御に立てた猛々しい心。
- ニ 中納言公宗が、父の意に反して、入道殿の孫の姫君を恋い慕う心。
- ホ 中納言公宗が、自分の妹である姫君をひそかに恋い慕う心。